法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<特別企画卒業論文を書き終えて(2)>私の卒論黄表紙・山東京伝 ： 「手前勝手御存知商売物・上方対江戸の合戦物としての考察」

塚原, 敦子 / ツカハラ, アツコ / Tsukahara, Atsuko

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
60
(開始ページ / Start Page)
110
(終了ページ / End Page)
110
(発行年 / Year)
1999-07-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020076

特別企画
卒業論文を書き終えて②

私の卒論　黄表紙・山東京伝

「手前勝手御存知商売物・上方対江戸の合戦物としての考察」

塚原　敦子

黄表紙をはじめて知ったのは、二年次の日本文芸史の中で日暮先生が紹介された芝全交の「大悲千禄本」だった。江戸庶民の間で大評判になったというこの本は、当時の人々の知的ウィットに富んだ日常が想像され、新鮮な驚きとうらやましさが混じった感動を覚えた。「卒論」ってちょっと楽しみなんて思っていた私にも、三年生になり具体的に何を書くのかを決めなければならない時がどんどん迫ってきた。幅広い近世文学の中で、今、もう少し触れて置きたいと思ったのが黄表紙だった。大学ではじめて出会ったのに挨拶もせずに別れるようでいかにも惜しかった。入学前に、すべてにおいて仕事優先と決めていたものの、さすがに四年生になると「卒論」の二文字が仕事中にも頭から離れず、朝、パソコンの電源を入れて真っ赤なメール（未読文書）でうまった画面を見たり、夕方の会議が長引いたりするとあせる気持ちに拍車がかかった。そんなとき黄表紙集の中にこの「御存知商売物」をみつけた。読めば読むほど面白く、ようやく卒論の題材に巡り合うことが出来、これで仕事にも卒論にも打ち込めると安堵したのを覚えている。

京伝の「御存知商売物」は、当時絵草紙問屋で扱っていた商売物のあらゆる書物を擬人化し、それぞれの書物の特徴を性格に織込み、物語を形作っている。私が特定できたのは全部で四十二種類の書物や印刷物だが、つい最近読んだ小池正胤著の「反骨者大田南畝と山東京伝」では四十六種類と書かれているので、私は四種類も見落としているらしい。

物語は、京都八文字屋の読み本が、行成表紙の下り絵本に、最近青本や洒落本が流行って自分達が読まれなくなってしまったので、それらにけちをつけようと持ち掛けるところから始まる。そして行成表紙は赤本、黒本にむかって君たちの本がすたれているのは、青本のせいだからけちをつけるようにとそそのかす。ここで、「手前は手を濡らさぬ工夫、上方者に油断はならず」と、上方批判が出てくるが、こんなところからひょっとして京伝は、この物語を上方対江戸の戦いとしてとらえ、上方勢をやっつけて江戸を勝利させ、お正月にめでたしめでたしと、江戸庶民の喝采をあびようと企てたのではないかと思い立った。上方と江戸の版元、出版物、商売、また思想家などについて比較しながら、この「御存知商売物」を読んでいった。京伝の絵のうまさも、細かさも、着想も楽しく、飽きることはなかった。

順調に進むかに見えた卒論だったが、資料を調べる過程で沢山の江戸文化に関する本に接し、今度は本を読む事のほうが面白くなってしまった。結局土壇場であたふたとまとめることになったのだが、それでも大学に入って良かったという充実感と、仕事を成し遂げたような達成感は、この卒論を仕上げたことで得られたものと大いに満足している。

（つかはら　あつこ・一九九九年卒）